

伊藤 裕子*

Yuko ITO*



露英翻訳家 S. S. コテリアンスキーとブルームズベリー・グループ

S. S. Koteliensky, Russian-English Translator, and the Bloomsbury Group

1911年イギリス。時代はエドワード朝からジョージ王朝へと変わった頃、ロンドンでは社会、芸術、文化も新たな局面を迎えつつあった。作家ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf)、芸術家・評論家ロジャー・フライ (Roger Fry)、クライヴ・ベル (Clive Bell)、芸術家ヴァネッサ・ベル (Vanessa Bell)、ダンカン・グラント (Duncan Grant) らを中心とするブルームズベリー・グループも、既成の考え方や古い制度にとらわれない前衛的な芸術や文学を生み出し始めていた頃であった。このロンドンを中心とした知識人グループに異色の人物が関わっていた。ウクライナ出身ユダヤ人のサミュエル・ソロモノヴィッチ・コテリアンスキー (Samuel Solomonovich Koteliensky, 1880-1955) である。本稿は、20世紀初頭にウクライナからイギリスへ亡命したコテリアンスキーの人物像と翻訳家としての活動を調査した研究ノートである。本研究ノートはコテリアンスキーにまつわる優れた研究書、Galya Diment による *A Russian Jew of Bloomsbury: The Life and Times of Samuel Koteliensky* に多くを負っている。

1911年といえば、ヴァージニア・ウルフの夫レナード (Leonard Woolf) が自叙伝において「深遠な変化が、政治や社会のみならず、あらゆる分野で起きていた。“Profound changes were taking place in every direction, not merely politically and socially.”」(*Beginning Again* 37) と説明する年であり、レナードはその変化について具体的にいくつかの事象に言及している。この時期に自動車や飛行機の開発が始まり、心理学や物理学が自身や宇宙についての認識を刷新した。芸術においても刺激的なことが起きていた。それから数年のうちに際立った前衛文学が出版される。絵画の分野では、印象主義から逸脱した芸術表現の構造的革命が起こり、イギリスではブルームズベリー・グループの活動がその芸術形式、すなわちポスト印象主義の原動力となった。そして舞台芸術においてもそうした絵画や音楽面の斬新性を伴った新しい動きが訪れた、とレナードは各方面の斬新な動きをまとめている。舞台芸術に関連しレナードは新しいバレエの登場について言及している。

そして何にも増して、夜ごと私たちはコベント・ガーデンに集合し、新しい芸術に有頂天になった。私たち無知な英国人にとっては新発見であったその芸術とは、ディアギレフとニジンスキーが最も華やかに活躍したところのロシア・バレエである。(37) (And to crown all, night after night we flocked to Covent Garden, entranced by a new art, a revelation to us benighted British, the Russian Ballet in the greatest days of Diaghilev and Nijinsky.)

* 中部大学国際関係学部国際学科

1911年はロシア・バレエがロンドン公演を始めた年でもあり、ロシアへの関心が高まりつつあった時期である。レナード・ウルフの友人を含むロンドンの知識人が夜になるとこぞってコベント・ガーデンに集結したのは、今も昔もこの時だけであったとレナード・ウルフは回想する(49)。

ロンドンのパーティ・ホステスはこの時、競って、ロシア・バレエのダンサーとロンドンの知識人階級を招き、公演後レセプション・パーティを開催した。芸術家レディ・ベアトリス・グレナヴィ(Lady Beatrice Glenavy)の記述によれば、キエフから英国を訪れていたサミュエル・ソロモノヴィッチ・コテリアンスキー(Samuel Solomonovitch Koteliensky, 1880-1955)は、ブルームズベリー・グループの画家マーク・ガートラー(Mark Gertler)とともに、友人が開催するロシア・バレエ団のレセプションルームに潜入した。このコテリアンスキーこそ、本稿が焦点を当てる人物であり、ブルームズベリー・グループと親交を保ち、ウルフ夫妻のホガーズ・プレスからロシア語書物の英訳書を出版する翻訳家である。

ロシア・バレエがロンドンで公演を行っていたころ、コット[コテリアンスキー]、ガートラー、ゴードン[Gordon Campbell, 2nd Barron Glenavy, ベアトリスと結婚]と私[ベアトリス]はどこかで食事をしたあと、ガートラーがシェアマン[Montague Shearman, 絵画収集家・鑑定家]のところへ行こうと言い出したので、実際行ってみたのです。ドアを開けると、驚いたことに、部屋はことごとくパーティーのためにアレンジされていました。いたるところに花が飾られ、ありとあらゆるきめ細やかなもてなしの品が配されていたのです—サンドイッチやケーキ、ワインボトルの数々、種々のデカンターやリキュール、大瓶のオーデコロンまでもが置いてありました。おそらくシェアマンは仲間とバレエを観に行っていて、ロポコヴァやディアギレフ、その他バレエ団員の半数は招待するつもりだったのでしょう。

説明はつかないけれども何かしらの並々ならぬ事情からでしょうか、コットとガートラーが狂乱してしまったようでした。荒れ狂い始めたのは実際コットだったのです。ワインボトルやリキュールに猛進して、飲み干し、サンドイッチを狂ったように両手につかんで、食べつくしたのです。飾ってあった花やクッションをあちこちに投げて散らかし、コットは、オメガ・ワークショップでロジャー・フライが作った、塗り物の木のお盆を持ってガートラーの頭にぶつけて割りました。今でも私はガートラーの驚いたような、歓喜した表情を思い出すことができます。お盆の木のかげらが彼の肩のところに襟のようにひっかかったまま、ガートラーはオーデコロンをいたるところに振りかけながら家具の上を飛び回っていました。コットは攻撃的なまでに真剣で、ガートラーはこんな常軌を逸した行為の一味となったことに笑いが止まらず、意気揚々としていました。(102)

(While the Russian Ballet was still having its season in London, Kot and Gertler, Gordon and I dined somewhere and afterwards Gertler suggested going to Shearman's room, which we did. On opening the door, we were surprised to find the whole place arranged for a party. There were flowers everywhere and every sort of delicacy--sandwiches and cakes, bottles of wine, decanters and liqueurs, even a large bottle of eau-de-Cologne. We guessed that Shearman was at the ballet with a party, and would be bringing them back, probably Lopokova, Diaghilev and half the company, after the show.

For some extraordinary reason which has never been explained, Kot and Gertler seemed to go raving

mad. It was really Kot who started it. They dashed at the bottles and the liqueurs, drinking everything and eating all the sandwiches, holding them madly in both hands. They threw the flowers and cushions all over the place and Kot took a painted wooden tray made by Roger Fry at the Omega Workshop and smashed it down with both hands over Gertler's head. I can still see Gertler's startled, delighted expression. The wooden rim of the tray hung round his shoulders like a collar, as he leaped about over the furniture shaking the eau-de-Cologne everywhere. Kot was fiercely serious, Gertler was hysterical with laughter and exaltation at taking part in something so outrageous.)

洗練を極めた場所を混沌と化すことの快楽はいかばかりであろう。特に、主催者が気を利かせて用意したルームフレグランスとしてのオーデコロンは繊細さや上品さの象徴なのであろうが、それを贅沢に撒き散らしパーティー会場を荒らした。そうした行為はロンドンの上流社会の流儀をあざけらう行為に他ならない。コテリアンスキーの真剣なまでの乱痴気騒ぎは、彼に似つかわしい行為ではなかったため、グレナヴィも呆気にとられているのであろう。コテリアンスキーの生涯を緻密に叙述したダリヤ・ダイメント (Dalya Diment) も、前述したグレナヴィの記述を引用し、これが虚栄と階級的偏見へのある種の声明としての行為であると同時に、気分が劇的に変化するコテリアンスキーの気質から来た行為であるとコメントする (58)。サンクト・ペテルブルグの洗練されたロシア芸術が「彼の」ロンドンでもてはやされることに、ウクライナの一地方出身者であるコテリアンスキーは、ある種の嫉妬を感じたのであろうか。それとも、ユダヤ人として、ロシア人に対抗する気持ちからくるものであろうか。ロシア・バレエ団のレセプション・パーティーに対する真面目な破壊的行為には、彼のそれまでの境遇が関連しているのかもしれない。

コテリアンスキーは、キエフ大学から奨学金を得て経済学の調査のため1910年に三か月のつもりでイングランドへやってきたのだが、その後、結局一生住みつくことになってしまった、と表向きには語っている。しかし実のところは1911年、ウクライナのオストロポールから政治的亡命者としてイングランドにやってきたのである。オストロポールはキエフから300キロ離れた地点に位置する、エカテリーナ2世の時代に辺境に追いやられたユダヤ人のシュテトルである。それは18、19世紀の帝政ロシアにおいてユダヤ人の居留が許された“Pale of Settlement” (革命の年1917年まで存続) 地域にある。19世紀末ロシアで実施された国勢調査では、この町のユダヤ人の人口は全体の37%に減少し (Diment 28)、ロシア人も住まう町となったのであるが、市場で賑わう町であった。コテリアンスキーはいくつかの製粉場も有したこの町のとりわけ裕福な商人の家系である。先祖をたどれば、プラハのカバラ主義者であるイエフダ・レーヴ・ベン・ベザレル (Rabbi Judah Loew) の弟子であり、*Tosafot yom tov* Commentary の著者、Yom-Tov Lipman Heller (1578-1654) に行きあたるといふ、知識人家系の出身でもあるとされる (Diment 32)。コテリアンスキーは、裕福なユダヤ系エリート家庭の子女と同じく、ロシア人学校へ通い、午後からはヘブライ語の学校へ通った (Diment 36)。

ジトミール・ギムナジウム (Zhitomir gymnasium) を卒業後、彼はオデッサに進学したが、政治的活動に従事するようになったため、1900年、20歳の時に警察による監視のもと、オストロポールでの居住を6年間余儀なくされた。1906年監視が緩和されると、彼はキエフ商業専門学校 (Kiev Commercial Institute) にて学んだ。この学校は当時ユダヤ人が学ぶことのできる限られた高等教

育機関のひとつであった (Diment 37)。コテリアンスキーがこの専門学校を卒業する1910年春、1200世帯のユダヤ人が過激な政治的活動の疑いのため、キエフから追放された。コテリアンスキー自身も政治的活動に関わっていたため、ロシア帝政警察の暴威を恐れたコテリアンスキーの母親が、彼をイギリスへ送ったといわれる (Diment 40)。

ユダヤ人を標的としたポグロムと呼ばれる襲撃について、黒川知文が1881年のポグロムに焦点を当てて多角的に論じている。それによると、ニコライ一世治世下 (1825年—55年) に帝政側のユダヤ人政策という名のもと強制同化策がとられた後、農奴解放後の大改革期はユダヤ人に対しても当初自由主義的同化策がとられた (アレクサンドル二世、在位1855年—81年)。しかし1860年代以降ポーランド反乱を機に、ユダヤ人を含む少数民族に対する政策が厳しくなり、「再びユダヤ人の人権を制限する政策をとるに至った……それに呼応して……国内において反ユダヤ主義的宣伝が、十九世紀後半には多くみられるようになった」という (黒川 164)。1881年に勃発した大規模なポグロムの加害者は、ロシア人出稼ぎ労働者を過半数含む下層労働者であるとされるが、建物の破壊と掠奪行為が主であり、死亡者は少ない (221—223)。それに対して1919年から1921年にかけての革命後内戦期には虐殺も多く発生したとのことである。

1881年の第一次ポグロムのころに生まれたコテリアンスキーは、このポグロムを直接には経験していないものの、ポグロムが幼少期より耐えがたい記憶として彼の脳裏に焼きついていて違いない。彼が20代の頃に起きた第二次ポグロム (1905—1906年) は、「皇帝政府が民衆の関心を革命からユダヤ人迫害に向けさせるために画策して実際に地方当局に命令して発生した」ポグロムであるといわれている (黒川275)。約960件の反ユダヤ人ポグロムが、特にロシア南部、南西部、キエフ、オデッサで勃発し (ロンドン・Zionist relief fund の情報による)、1906年末までに三千人以上のユダヤ人が殺害された (Diment 33)。

ポグロムを逃れようと、1881年から1914年までの間にイギリスへも15万人のユダヤ人移民が訪れたといわれるが、彼らのほとんどは貧しく、十分な教育も受けていなかったといわれる。労働者階級が多く住まうロンドンのイースト・エンドに居住し、ユダヤ人コミュニティを形成した (Diment 45-46)。コテリアンスキーはこうした多くのユダヤ人移民とは一線を画し、富裕知識人階級に属し、ロンドンにおいても中流階級の街に居を構え、移住当初、ロシア語新聞『キエフ・ポスト』 (*Kievskaja pochta*) 紙および雑誌『祖国』 (*Otechestvo*) の特派員として執筆を行っていた (48)。

コテリアンスキーは、作家 D.H. ロレンス (Lawrence)、そしてキャサリン・マンズフィールド (Katherine Mansfield) と親交を深め、ユダヤ人芸術家のマーク・ガートラー (Mark Gerlter) とともに、境遇が似ていたこともあって親しくした。ロンドンの美術学校スレイド・スクール (Slade School of Fine Art) へ通っていたガートラーがブルームズベリー・グループの仲間であったため、コテリアンスキーもこの知識人サークルの活動を共にして行くことになるのだ。レナード・ウルフは、1955年コテリアンスキーの故人略伝において、彼は握手をすれば、相手の手の骨が砕けるほどの力で握るといった情熱的な友好の情を表す。またロレンスがコテリアンスキーを気に入った理由は、好き嫌いがはっきりしており、それを隠そうとしない、また歯に衣を着せない、猛烈なまでの言語で批判するからだとしてレナード・ウルフは述べる ("Kot" 172)。また好きな人物に対しては、「わかるだろ、彼は真の人間だ、まさしく真の人間だ "You see, he is a real person, yes a real person"」と言って、その人物と真の祝福を分かち合うとのことだ。コテリアンスキーがウルフに語ったロレ

ンスにまつわる逸話には、以下のようなものがある。コテリアンスキーがロレンスおよび彼の妻フリーダ (Freida Lawrence) と旅行に出かけた際に、フリーダが離婚した夫との間の三人の子供たちと会えないことを嘆いた。コテリアンスキーは「フリーダ、あなたは子供たちを捨ててロレンスと結婚したのでしょうか。ロレンスを選んだのであれば子供たちのことは諦めなさい。」とはっきりと伝えたという。その時彼らは出会ってからまだ三回目であった。フリーダは気分を害してかその場を立ち去った。その後雨降りしきる中、びしょぬれになって一人の女性が現れ、「ロレンゾーよ。[ロレンスを指している。シェイクスピア『ヴェニスの商人』の登場人物。ユダヤ人商人、シャイロックの娘と駆け落ちし、キリスト教に改宗させて結婚する。このセリフでは、ロレンスの直属の教授であったフリーダの最初の夫から、彼女を駆け落ちして奪ったことの揶揄であろう。]フリーダの伝言だ。彼女はもう戻ってこない。」と告げに来た。それに対してロレンスは怒り狂って「もう二度と顔も見たくないと告げてくれ」と言った。その女性は無言で立ち去った。しかしその女性こそ、後にコテリアンスキーの親友になる、キャサリン・マンスフィールドであった ("Kot" 172)。コミカルな笑いを誘うこの逸話から伺えることは、コテリアンスキーの言動が率直であるばかりか、母親が子供に会えない心境に対して、同情や慰めの言葉も持ち合わせていないことだ。あるいは、「諦めなさい」と断言すること自体が、彼が友好を深めたいと思っている人物に対する心からの助言だったのかもしれない。

イギリスでの、コテリアンスキーの最も大きな功績はロシア文学の英訳である。彼が見立てたロシア文学は、ホガース・プレス (Hogarth Press、ウルフ夫妻の出版社) との協賛によりウルフ夫妻との共訳のかたちで出版され、ロシア文学がイギリスに紹介される役割を果たしたのである。レナード・ウルフもまたユダヤ人であった。

ブルームズベリー・グループと関わりがあり、同じくロシア文学の英訳に携わった人物として、ロシア人 D. S. ミルスキー (Mirsky) を挙げることができる¹。ミルスキーはロシア貴族階級出身であり、「プリンス」の呼び名があった人物である。ミルスキーは貴族であるがために、第一次世界大戦、そしてボルシェビキ政府による破滅的な社会変革により災難を被った。革命政府を逃れるために亡命をしているという点において、コテリアンスキーとは状況が異なる。ミルスキーは1917年初めのうちは帝国軍の一員としてボルシェビキに対して戦いを挑んだといい、自称、反共産主義者をうたっている。ミルスキーはウルフ夫妻に1924年パリで出会い、その後ロシア文学の翻訳に関わるが、コテリアンスキーとは面識がないと言われている。その二人のお互いの評価は惨憺たるものである。ミルスキーはコテリアンスキーのことを「田舎育ちの素人 ("a provincial amateur")」としてさげすんでいたという記録がある (Smith 99)。他方コテリアンスキーは、ミルスキーの *Lenin* (1931) を読んで酷評している²。

コテリアンスキーは、他のロシア人、例えば後にメイナード・ケインズ夫人となる、リディア・ロポコーヴァ (Lydia Lopokova) をも敬遠していた。ダイメントによれば、ウクライナの田舎出身の彼は、都会のサンクト・ペテルブルグ出身のロシア人であるロポコーヴァに対抗意識を持ち、イギリス人が十把一絡げにロシアから来た人々をロシア人として同一視することを非常識であると嫌悪していた (Diment 58)。イギリスに居住する彼は、ウクライナ出身であること、またユダヤ人であることの誇りを持続けたのだといえる。

1917年、ロシアの2月革命は、ロシア国外在住者のコテリアンスキーに新たな希望と興奮を一

時的にもたらした。ウクライナのユダヤ人を苦しめたロマノフ朝による帝政が崩壊し、民主化への動きと、ケレンスキー臨時政府首相による自治政府承認、ウクライナ独立のニュースに沸き立った (Diment 93)。しかしそれもつかの間、11月革命を起こして革命臨時政府を倒したボルシェビキが政権を掌握した。ボルシェビキはウクライナ自治政府に対して強硬な姿勢を取り、武力行使によって自治政府軍を敗北に追いやることになる。

ウルフ夫妻は1918年1月コテリアンスキーをディナーに招待した。ヴァージニア・ウルフは彼女の日記に、コテリアンスキーがロシアを冷めた目で眺めており、ロシアが野蛮の域を抜け出しておらず、革命をしたところで意味がないだろうと述べたことを記している。

時折コットは、崩れた英語ではあるが改まった様子でロシアについて述べていた。コットについてはたくさん言うことがある。彼は文学界のロシア人たちに似た傾向がある。彼は前置きもなく自分の心魂を説明し始めることがよくある。彼はキャサリン [マンスフィールド] の心魂は大したことない、と説明した。彼女の嘘やそぶりに彼は辟易しているし、彼女にはほんの僅かばかりの物書きの才能以上に何も見つけられないと言った。この最後のコメントが私を喜ばせたのかは知らないが、その理由で私はこのことを書き留めたのかもしれない。彼は独特の政治観を持ち、ロシアは革命の恩恵を受けるにはあまりにも文明が遅れていると考えている。しかしここイングランドでは膨大な利益を享受できる運命にある。なぜなら最も貧しい家々にもカーペットがありガスがあるから、とのことだ。彼はロシアにはほとんど関心がない。戻る気などほとんどない。春に独立戦争が起きると予言しているが、それに勝ったとしても何の利益もないだろうとのことである。1905年にロシアは民家を燃やし尊い人々をも突き刺したのだ。(The Diary of Virginia Woolf, Vol. 1, 108, 18 January 1918)

(At intervals Kot delivered a formal address upon Russia in broken English. There is a good deal to be said for Kot. He has some likeness to the Russians of literature. He will begin to explain his soul without preface. He explained Katherine [Mansfield]'s soul, not at all to her credit. Her lies & poses have proved too much for him, nor does he find more than a slight gift for writing in her. I don't know that this last pleases me however, though it sounds as if I wrote it down for that reason. He is individual in his view of politics, thinks Russia too little civilised to profit by revolution, but here in England its bound to come with immense benefit because we've carpets & gas in our poorest houses. Russia scarcely interests him; he never means to go back; prophesies civil war in the spring and no advantage won by it. In 1905 they were burning houses & stabbing nobles, too.)

コテリアンスキーはロシアに戻る気などない、と日記に書き留めるウルフは、彼の民族性とその背景について誤解をしている。あるいはウルフをはじめその仲間たちは、ロシア語を操る彼の故郷をロシアであると思い込んでいる。コテリアンスキーはロシアの出来事を憂慮しているが、英国に住まうことの恩恵を強調している。第二次ボグロム、そしてそれまでのユダヤ系ウクライナ人へのロシアの厳しい待遇の記憶を伴って、彼はロシアをすでに他者として突き放している。それゆえ彼は、イギリス人が彼をロシア人の一人として一括りに捉えることに嫌悪を感じているのである。他方で彼はイングランドをはるかに進んだ文明の国であるにとらえ、この国の生活レベルの高さを賞賛し

ている。そこに住まい、前衛の文筆家および芸術家のグループと親交を結ぶことを大事にしている。ウルフ夫妻の前で、友人キャサリン・マンズフィールドの能力を皮肉たっぷりにコメントし、ヴァー ジニア・ウルフの優越感をくすぐることを忘れない。ウルフ自身、コテリアンスキーのことを書き 留めたのは、マンズフィールド批判が彼女にとって心地よいもので記すのにふさわしかったからだ と述べている。

ウルフはさらにコテリアンスキーの異質性について日記の中で述べている。ウルフは彼の持つ 雰囲気と上層中流階級の限界であるセント・ジェイムズ・スクエアの洗練さといったものの間に ギャップを感じている。

街で私たち[ウルフ夫妻]はコットに出会った。彼は私たちを D.H. ロレンスに引き合わせたがつ ていた。あるいはロレンスをここへ招待してもらいたがつている。コットの血走った目、そし て彼全体を包んでいるむさくるしさといったものが、セント・ジェイムズ・スクエアのど真ん 中で私たちに衝撃を与えた。彼は謎に包まれた人物である—彼の職業だけでなく、たとえ友達 がたくさんはいないようであるにしても、私たちの友達になりたいという願望においてもだ。(Diary I, 176-177, 1 May 1918) (In the street we . . . were then stopped by Kot. Who wanted us to come & meet D. H. Lawrence—or perhaps to ask him here. Kot's blood shot eyes, & general sordidity struck us in the middle of St James Square. He is a mysterious figure—not only in his occupations, but in his desire to be a friend of ours, though he seems without many friends.)

社会の規範に対する考え方においても芸術スタイルにおいても、いわばエクセントリックであるウルフにとっては、こうしたイギリスの階級構造や社会規範の外側に存在する知識人コテリアンスキーは、相容れない存在ではなかったように思われる。彼のひたむきなアプローチに、ウルフは自己謙遜的に好意を抱いているのではないかと考えられる。

イギリスでのロシア文学事情はどのようなものであったかと言えば、ツルゲーネフがイギリスで賞賛された最初のロシア作家であり、20世紀初めの数年の間にドストエフスキーの文学への興味が高まる。しかし『カラマーゾフの兄弟』が出版されるまではあまり読まれてはいなかった。『罪と罰』も英訳されていたが絶版になって、多くの人が読める環境にはなかった。第一次世界大戦と同時期の1912年から1920年にかけてドストエフスキーは最も人気を博した。ブルームズベリー・グループに属す伝記作家リットン・ストレイチー (Lytton Strachey) は1912年、コンスタンス・ガーネットの新訳『カラマーゾフの兄弟』について、イギリスのロシア文学の読者は、ロシア文学の「異様さ」を切り抜けないといけないと述べる (Clarke "Introduction" by Marcus xix)。英語 "Russophile," "Russo-latrour," "Russo-maniac" (「ロシアびいき、ロシア賛美、ロシアきちがい」) といった単語は OED によれば、初出は1880年である。イギリス人のロシアびいきは、19世紀末におけるロシア文学の英訳や20世紀初頭におけるロシア・バレエの公演によって高まりを見せる。20世紀初頭イギリス文壇にみられたロシアへの関心は、民俗学的な関心、すなわち異質な民族の系譜を読み解くといったものではなく、その文学の真に詩的な価値に向けられたとデイビソンは述べる (Davison 4)。ナターリヤ・レインホルド (Natalya Reinhold) が論じるように、その関心は単にイギリス人がロシア芸術や文学に一般的な興味を抱いていたから生じたのではない (Reinhold 1)。

ロシア文学の模索はイギリスにとっての、あるいはモダニズムを担った作家にとっての「他者」の領域と新しい現代的言説を探索することに他ならない。イギリスとロシアの間に横たわる複合文化的空間の中に「文化的他者」を位置づけるべきである (Reinhold 3)。すなわち、モダニズム作家らは、自らが追及すべき、新しい言説を可能にする他者をロシア自体に求めたのではなく、ロシア文化とイギリス文化の混じり合った領域に追求したのだといえる³。コテリアンスキーが担った露英翻訳はその媒介となったのだ。

ロシア人という大雑把な括りに入れられることを拒否しつつも、コテリアンスキーはイギリスにおいて彼のロシア語能力を用いて、ロシア文学作品の翻訳出版を行うことになる。彼にとって翻訳活動とは、彼のイギリスにおける居場所である芸術家や文学家のグループに対して、新たなインスピレーションを届けるといった貢献であると同時に、そうした知識人階級へ彼自身をアピールすることであったかもしれない。露英翻訳家としての活動は、キャサリン・マンスフィールドの夫となる (1918年結婚) ジョン・ミドルトン・マリー (John Middleton Murry) との共訳により、アントン・チェーホフの短編集、*The Bet and Other Stories* を1915年にロンドンで出版することに始まる。1916年にはドストエフスキーの短編 "The Dream of a Ridiculous Man" (1877) と Pushkin 論講義を盛り込んだ *Pages from the Journal of an Author*、アレクサンドル・クプリーンによる短編集 *The River of Life and Other Stories*、そしてコテリアンスキーと同じキエフの商家出身のユダヤ人であり哲学者のレフ・シェストフによるチェーホフ論の英訳を出版した。コテリアンスキーには、同郷のユダヤ人であり、まだイギリスでは未知のシェストフの名を広めたいという目論見があった (Diment 122-23)。

革命前夜の1916年、ドストエフスキーの *Pages from the Journal of an Author* をコテリアンスキーとともに訳した英国人文筆家ジョン・ミドルトン・マリー (John Middleton Murry、キャサリン・マンスフィールドの夫) はその序文において、ドストエフスキー文学のロシアらしさを賞賛している。

彼 [ドストエフスキー] は親スラヴ主義的理論を熱烈に抱いている。その理由はその教義の物質的詳細を彼が信じているからではなく、スラヴ主義こそが世界の面前でロシアというものを立証してきたし、また今もなおそうであるからなのだ。ドストエフスキーの最大の関心事は、ロシアが否定されるべきではないこと、そしてロシアの子供たちがロシアを信じることである。 (Dostoevsky, *Pages from the Journal of an Author* 8) (He embraced the Slavophile doctrine ardently, not because he believed in its material details . . . but because it did, as it still does, boldly confess Russia before the world. This was all that he cared for, that Russia should not be denied, that her children should believe in her. . .)

マリーは序文において "He became the great writer of the Russian land," "he was a great Russian" といった表現によって、ドストエフスキーのロシア性を強調している。マリーが言うところの「西洋人 (the Westerners)」にとって、ロシア性は異質なものであることを主張し、イギリスやアメリカの読者にとって、ロシアの西洋らしさではなくそのスラヴ性にこそロシアの価値を見出すべきと指南している⁴。

一方、レフ・シェストフのチェーホフ論については、コテリアンスキーはその翻訳を売るために、

友人 D. H. ロレンスに序文を書いてもらうが、その序文がシェストフに対する侮辱を含み、またロシア文学を翻訳出版するにあたり序文でロシア文学を非難するのはふさわしくないとして、ロレンスに書き直さなければ没にしたいと告げる。しかしロレンスはシェストフ自身の論点を繰り返したただだと突っぱねた (Diment 123-24)。

「ロシア人の精神」の一節において、シェストフはロシア文学を理解する真の手がかりを私たちに提供する。ヨーロッパ文化はロシア人には根付いていない。私たちにとってそれはまさしく血、骨であり、神経でありまた精神の基盤である。私たちはある様式で考え、ある様式で感じる。なぜなら私たちという存在全体がこの様式を持ち合わせているからである。私たちの言説も感情も私たちにとっては自然に必然的なものである。

ロシア人にとっては事情が違う。彼らはただヨーロッパの文化や倫理のウイルスを接種されてきただけである。そのウイルスは病気のように彼らの中で作用する。ひきおこされる炎症や過敏症が文学となって表面化するのだ……

ロシア人が格闘し、それに反対して叫んでいるものは、人生自体ではない。その対象はロシア人の精神に導入されてきたヨーロッパ文化に他ならず、それが彼を傷つけているのだ。その悲劇は本当の魂の悲劇というよりは、外科手術的なものである。ロシア芸術、ロシア文学は結局ヨーロッパ、ギリシャやエジプト芸術と同じ土台には立っていない。それは自発的な発話ではない。それは民族の繁栄ではない。それは外科手術的な悲鳴であり、ぞっとするようなものであるか、あるいは当初は驚くべきものであっても、引き裂くようなものである。

("Foreword" by D. H. Lawrence, Leon Shestov, *All Things are Possible*, xvii-xviii)

(In his paragraph on the Russian Spirit, Shestov gives us the real clue to Russian literature. European culture is a rootless thing in the Russians. With us, it is our very blood and bones, the very nerve and root of our psyche. We think in a certain fashion, we feel in a certain fashion, because our whole substance is of this fashion. Our speech and feeling are organically inevitable to us.

With the Russians it is different. They have only been inoculated with the virus of European culture and ethic. The virus works in them like a disease. And the inflammation and irritation comes forth as literature. . . . What the Russian is struggling with, crying out against, is not life itself: it is only European culture which has been introduced into his psyche, and which hurts him. The tragedy is not so much a real soul tragedy, as a surgical one. Russian art, Russian literature after all does not stand on the same footing as European or Greek or Egyptian art. It is not spontaneous utterance. It is not the flowering of a race. It is a surgical outcry, horrifying, or marvellous, lacerating at first. . . .)

ロレンスは、ロシア人の精神を、「我々」ヨーロッパ人とは本質的に異なるものであると位置づけ、ロシアにおける西欧化は外科手術によって取ってつけたものにすぎず、それがロシアに自然に馴染むことはないと述べる。西欧化の中でのひずみからくる苦痛がロシア文学や芸術を生み出しているというのだ。自分たちよりも文明が進んでいるとロシアが考えるヨーロッパの文化を歴史的に自らの内に取り入れてきたにもかかわらず、ヨーロッパの一員とは決してなり得ないことをロレンスは暗示している。イギリスにおけるロシアというものは、異質なものを覗き込む感覚、あるいはエグ

ゾティシズムへの期待を読者に抱かせるような要素があつて然るべき、とするのであればオリエンタリズムの思考であるが、ロレンスはそうではなく、西洋の影響のないロシアから生み出される真の芸術を期待したかったのであろう。こうした序章を、コテリアンスキーは受け入れられなかったのは、彼は翻訳家としては中立的な立場をとっており、ロシアの政策に翻弄された自らの生の体験やロシアにおける西洋化の問題以前に、シェストフ文学の本当の価値を翻訳を通してイギリスに知らしめたいという芸術的感覚を持ち合わせているからではないかと思われる。

ロシア人作家であり詩人、また男装家でもあるジナイダ・ギッピウス (Zinaida Gippius [Hippius], 1869-1945)⁵ の作品も、コテリアンスキーの目利きにより1920年に英訳された。初めて英訳出版された彼女の戯作、*The Green Ring* の訳者解説において、コテリアンスキーはギッピウスについて以下のように述べている。

ヒッピウス [ギッピウス] はその他の若い作家と共に「ニュー・ムーヴメント」を代表する。彼らはデカダント、象徴主義者、審美主義者などとあだ名をつけられている。そう呼ばれていた所以は、そのころのロシア文学や定期刊行物に蔓延していた、ほとんど窒息しそうな「市民的」目標に抵抗していたからであった。(Hippius *The Green Ring* 5)

(Hippius, together with a group of young writers, represented the “new movement.” They were nicknamed decadents, symbolists, aesthetes, etc., chiefly for their opposition to the strangling influences of “civic” motives that prevailed in Russian literature and in the periodicals of that time.)

コテリアンスキーは高邁な革命思想における理想主義的市民像の限界を見定めたような、ギッピウスの作品を評価している。前衛主義的なロンドンの文壇に紹介するにはふさわしいかに思われる。

しかしいずれの翻訳書も不人気であったばかりか、出版社から支払われた著作権使用料の配分を巡って、著者との間にトラブルが相次いだ (Diment 125-26)。ダイヤモンドによれば、ロシア革命後のボルシェビキ政府は暫定政権であるので、著作権に対する取り決めも無いに等しかった。それゆえコテリアンスキーは著者に対しての支払い義務は基本的には無いとしたものの、彼は自主的に自分が得た著作権使用料を著者と分け合った (127-28) との逸話があるとおおり、著者に対して敬意を払う律儀な人物であることがわかる。

時を前後して1919年から23年の間、ホガース・プレス出版により、イギリスでは知られざるロシア文学をウルフ夫妻らとの共訳のかたちでさらに紹介することになる。先に引用した1918年のヴァージニア・ウルフの日記にみられる通り、ロシア革命を機にロシア文学への関心も一層高まり、ウルフ夫妻もまたその頃、現代ロシア文学の実情を探るためにも、時折コテリアンスキーをディナーに招待していたのだ。社会主義思想をもつレナード・ウルフがコテリアンスキーの革新主義的な政治思想に共鳴した可能性もある。もっとも共訳によるロシア文学の翻訳出版は、コテリアンスキーの側からウルフ夫妻への働きかけによって実現する。ウルフ夫妻は、訳すからにはロシア語を知るべきだという考えから、コテリアンスキーからロシア語も教わることになる。コテリアンスキーはまずはマキシム・ゴーリキーによる回想録の翻訳出版の話を持ち掛けた。翻訳はレナード・ウルフとのコラボレーションにより行われた。こうして1920年、*The Reminiscences of Leo Nicolayevich Tolstoi* がホガース・プレスから出版される。初版の一千部はすぐに売り切れたため、さらに一千部

の印刷にかかったとのことであり、今回は好調な滑り出しであった (Diment 133)。

レナード・ウルフはゴーリキーの *The Reminiscences* の審美的な美しさを評価している。

私はこの翻訳をすることによって得られた以上の審美的快楽を、ほかのなにものにも味わったことがないと思う。これはそれまでに書かれた中で最も注目に値する伝記的作品である。これを読めばトルストイとその登場人物が話しているのが聞こえるようであり、彼らを見て感じるができる。まるで同じ部屋に座っているかのように。彼の偉大さや狭量さ、有頂天になっているさまや複雑な腹立たしさ、彼の強く詩的な人格、そして彼の極上のユーモアを感じ取ることができるのだ。文体は美しく、どの言葉もどの文も完璧である。度を越えた言葉や文はこの書物には一つとしてない。このうっとりするようなロシア語を適切な英語に訳すことに、私は計り知れない喜びを得た。 (*Downhill All the Way* 67)

(I do not think that I have ever got more aesthetic pleasure from anything than from doing this translation. It is one of the most remarkable biological pieces ever written. It makes one hear, see, feel Tolstoy and his character as if one were sitting in the same room—his greatness and his littleness, his entrancing and infuriating complexity, his titanic and poetic personality, his superb humour. The writing is beautiful; every word and every sentence are perfect, and there is not one superfluous word or sentence in the book. I got immense pleasure from trying to translate this ravishing Russian into adequate English.)

レナード・ウルフによるゴーリキーについての記述は、ゴーリキーの異国性に着目するのではなく、文学としての素晴らしさを対等な立場から評価している。ヴァージニア・ウルフもまた、ヴァイオレット・ディキンソン (Violet Dickinson, ウルフの年上の友人) への手紙に、「トルストイの本は、私たちがその本の出版者であるからというわけではない。私には素晴らしいものに思われる "the Tolstoy, in spite of our being the publisher, seems to me splendid" (*Letters II*, 434)」とコメントし、賞賛を送っている。

このころまでには、コンスタンス・ガーネット英訳によるトルストイの『戦争と平和』(1911) や、『イワン・イリイチの死』(1915) がすでに出版されており、全21巻からなる『トルストイ全集』もオックスフォード大学出版から出版されることになる (1928-37)。イギリスにおける空前のロシアブームの最中、ロシアへの興味が十分に確立されてきた時代でもあったのだ (Willis 85)。この成功を皮切りに、ホガース・プレスはコテリアンスキーとの共訳により、数年間にわたってロシア時代を築く。コテリアンスキーが紹介したのは、トルストイの文学作品そのものではなく、この作家をとりまく周辺の書き物であった。伝記作品、逸話、プライベートにまつわるものであり、偉大な文学者の人生や思考に光を当てるものであった (Willis 85)。

ヴァージニア・ウルフはロシア文学にまつわるエッセイ "The Russian Point of View" (1925) において、ロシア文学理解のための指南を行っている。ホガース・プレスから出版されたロシア文学への理解を促進するためであろう。彼女は外国文学の翻訳にまつわる限界、すなわち原文中の文化や人々の考えなどを伝えることがいかに困難かについて述べ、ロシア文学とイギリス文学の違いについて、チャーホフ、ドストエフスキーそしてトルストイを例に挙げて説明している。チャー

ホフの短編の結末のパターンは、イギリスの小説の場合とは異なり、著者が具体的に示すようなものではない。何気ない、意味性を喪失したかにみえる登場人物の描写に、読者はその魂 (soul) を感じ取るべきである、とウルフは述べる。さらに軍司令官の恋愛沙汰をテーマにするならば、イギリスの小説家はまずは立ち位置を決める。たとえば階級を決め、その階級に合った人物ならびに周囲の描写、伝統、マナー、言葉を選ぶ。それに対してドストエフスキーは、貴族であろうが馬鹿者であろうが、ルンペン、はたまた偉大な婦人であろうが、「あなたが誰であれ、あなたは、混乱した液体であり、淀んで、イーストのように発酵した、貴重な代物である魂の器なのである。その魂は障壁によって抑圧されてはいない。それは溢れ出て、氾濫し、他者の魂と混じり合うのである ("The Russian Point of View," *The Common Reader* 228)。("Whoever you are, you are the vessel of this perplexed liquid, this cloudy, yeasty, precious stuff, the soul. The soul is not restrained by barriers. It overflows, it floods, it mingles with the souls of others.")」、といったスタイルで描写を行うのだとウルフは叙述する。ある登場人物の魂が別の登場人物の魂と混じり合う状況では、階級制といった垣根は意味をなさない。トルストイに至っては、イギリスでは「異質で、難しく、外国人 ("alien, difficult, a foreigner")」であると考えられがちであるが、その登場人物像にしても、これまでイギリス人がロシアと聞けば連想するような、野蛮人や野生の子供を思い浮かべる必要はなく、極めて理解可能であるとも説く。

コテリアンスキーとヴァージニア・ウルフとの共訳によりホガース・プレスから出版された書物として注目すべきは、本来ドストエフスキーの『悪霊』(1871-72年、雑誌 *The Russian Messenger* に掲載)の一部として執筆されたが、編集長により検閲削除された章、『スタヴローギンの告白』である。この章を含むドストエフスキーの原稿に、コテリアンスキーが目をつけたのである。この章には、十代前半の少女に対する深い罪を告白するスタヴローギンと聖職者との間の入り組んだ対話が描かれている。翻訳においては、ドストエフスキーによって入念に描かれた、一人の人物から別の人物へと移ろう視点の変化を巧妙に描き、翻訳として読まれる際に、原文に含まれる意味の両義性が伝わるように仕組まれている (Davison 89)。そうすることにより、作者自身、あるいは登場人物が持ち合わせる倫理観や精神性の「揺れ」といったものを、そのまま一貫性のないものとして表現している。往々にして翻訳といったものが、訳者の独断によって原文の曖昧さをなくす努力をするのに対して、コテリアンスキー・ウルフ訳は非決定性をそのまま重んじたのだ。

コテリアンスキーとウルフ、そしてマンスフィールドの共同制作としての翻訳について論じたデイヴィソン (Davison) によれば、彼らの共訳は原作の声を借りて、劇のように脚色したもの、あるいはその声を増殖させたものであるとする (52)。デイヴィソンは文体論的比較を行ったうえで、彼らの翻訳では、この時代の型どおりの言語学的、翻訳的な規範を逸脱していると述べる。さらに、ロシア語原文の言葉のパターンに限りなく類似させつつも、英語的な詩的表現と連想を持ち合わせており、ロシア語散文を英語に近づけた「前衛的な」翻訳であると評価している (78)。

コテリアンスキーは、1929年英国に帰化した。祖国を離れて彼自身の第二の故郷となったイギリスに、彼は感謝の意を表している。彼と親しい付き合いのあったディリス・パウエル (Dilys Powell ジャーナリスト、映画評論家)の故人略伝によれば、「彼はこの国の気質、ものの考え方、感じ方を愛した。彼はイギリス人よりもイギリス的であった。そして彼の人生の最後の数週間には、彼の誇らしいユダヤ人的な義務感から、英国の臣民になれたことの御礼をしたいと、強

く希望を語っていた。"He fell in love with the temper, the way of thinking and feeling of this country. He was more English than the English; and in the last weeks of his life he was talking, with his proud Jewish sense of obligation, of his desire to make a thank-offering for being an English subject." (Powell "Mr. S. S. Koteliensky." *Times* [London, England] 27 January 1955. 10.)」とあるように、イギリスを愛したコテリアンスキー像がうかがわれる。そうした感謝の念は、自身がやり取りした手紙をすべて当時の大英博物館（内の大英図書館）に遺贈したという行為にも表れている (Zytaruk xiv)。1955年3月24日 *Evening New* 紙（ロンドン）は、「英国を愛したロシア人」"A Russian Who Fell in Love With Britain" と題してこの遺贈にまつわる記事を掲載した。

彼 [コテリアンスキー] の遺言により、彼は著名な英国の作家から彼に送られた全ての手紙を大英博物館に遺贈する。彼はその理由を以下のように記す。「イングランドへの、そして半世紀に渡り私が享受したこの国の多くの作家や人々との交友への感謝のしるしとして」(In his will he bequeaths all letters written to him by famous British authors to the British Museum. And he wrote the reason: "As an acknowledgement of my affection for England and of the friendship I have enjoyed with many of her writers and citizens for nearly half a century.")

コテリアンスキーをロシア人と定義するイギリス人の認識もまた、おそらく本人にとってみれば、自身のイギリスにおける致し方のない一つのアイデンティティとなっていたのかもしれない。ブルームズベリー・グループやその他の作家との交友を楽しみ、中立的な立場からロシア文学を翻訳し、イギリスに紹介したコテリアンスキーの生涯は、以上のようなイギリスへの感謝の念を持って締め括られている。この「Koteliensky Papers」と呼ばれる資料はイギリス文学研究家にとっては宝庫なのである。

彼がイギリスに帰化した頃、ロシア文学がヴァージニア・ウルフなどイギリスのモダニスト作家の文学的表現も借りつつ英訳されたということをふまえるなら、イギリスモダニストの視点と語りもまた英訳ロシア文学の文学的価値付与に貢献したのだといえる。そしてそこには、訳者による緻密な原文の価値を損なわない訳出と、原文にも表現されているであろう既成のものの考え方に反対する周到な脚色が含まれているのである。

注

- 1 ジャン・ミルズ (Jean Mills) は、ミルスキーが関わったホガース・プレス出版の翻訳書について論じている。それによると、ヴァージニア・ウルフが *A Room of One's Own* を捧げた、彼女のメンターである文化人類学者ジェイン・ハリソン (Jane Harrison) が翻訳し、ミルスキーが序章を執筆した、17世紀ロシア正教会の古儀式派指導者である長司祭 Avvakum による自伝、*The Life of the Archpriest Avvakum by Himself* は、ちょうどレーニンが死去し、スターリンの独裁体制が始まる1924年に出版された。これはモダニズムにとって興味深い、革命以前の神話化されたロシア原始主義を秘めた著作であるが、ミルスキーとハリソンの試みはこうした革命以前のロシアの紋切り型のイメージを複雑化し再定義したのだと、ミルズは評価する。ミルスキーはロシア原始主義を超えた Avvakum 自伝の価値が、洗練された日常言語の使用にあるのだとし、それがこの文学のモダニティを証明するものだと述べる (Mills "The Writer, the Prince and the Scholar: Virginia Woolf, D. S. Mirsky, and Jane Harrison's Translation from Russian of *The Life of the Archpriest Avvakum, by Himself*").
- 2 コテリアンスキーはミルスキーについて述べている。「腐っている・・・彼はどれだけでも嘘を言う気があり、どこまでも自分自身を辱める準備が出来ている。ロシアへ帰国する許しを得るためだけに。彼に必要なのは怒りではなく私たちによる祈りである。"rotten... he was prepared to tell any number of lies, to humiliate himself to any extent, just to be allowed to return to Russia: he needed not anger but our prayers..." (Esther Salaman, 'Prince Mirsky' *Encounter* 54 (1) (1980), 94, cited in Smith 99)」。コテリアンスキーによるこのコメントは、ミルスキーに対する怒りを超えて、祈りの域まで達していることを皮肉をまじえて述べている。ロシアにおけるツァーリ政権における貴族の優遇、そしてユダヤ人への薄遇の歴史を考えれば、コテリアンスキーにとって貴族階級とは、苦々しい存在であったに違いない。
- 3 もちろんコテリアンスキーが英訳したロシア文学がモダニズム的言説を呈していたとは言えない。時にそれらのロシア文学は、ロシアにおけるロシア正教の問題を現代的に再検討するといったレベルに過ぎないテーマであるかもしれない。言説自体の新しさはウラジミール・マヤコフスキー (1893-1930) を待たねばならないが、レインホルドも述べるようにモダニズム作家に新しいポエティック・インヴォケーションを与えたのは確かである。
- 4 ロシアにおける西洋派とスラブ派の対立、錯綜については政治的、文化的側面からオーランド・ファイジスが『ナターシャの踊りーロシア文化史・上』にて詳説している。18世紀初頭よりピョートル一世による西洋化政策の波の中、すでに18世紀末にはモスクワ地方の地主文化といった民族文化を西洋化した国家から守ろうという動きが発生していた (ファイジス 107)。西洋化によるロシアの近代化政策への期待の中で、ロシアはヨーロッパではなく、ヨーロッパの一部にもなれないことをロシア人は痛感しており、ヨーロッパに対して劣等感に苛まれてきた (118)。しかし同時にスラヴ文化が改めて評価され、ロシア性とはその民衆性にあることを再認識する動きが、1812年ナポレオン戦争を機に活発化し、19世紀ロシアではそれは文学、芸術においても表現された (165)。
- 5 ギッピーウスについて海野弘は『ロシアの世紀末』において「ロシアの世紀末の芸術界の女王」と評している。彼女について特筆すべきは思想家メレシコフスキーとの結婚、前衛ロシア・バレエを率いたセルゲイ・ディアギレフの従兄弟であり、ロシア象徴主義の芸術誌『芸術世界』編集者の一人フィロソフとの恋愛である。その後、ギッピーウス、メレシコフスキー、フィロソフは彼らの理念のもと三者間でキリスト教の三位一体に準えた聖婚式を行ったとのことである (海野 143-146)。

引用文献

- Clarke, Stuart N., ed. *Translations From the Russian by Virginia Woolf and S. S. Kotliansky*. Virginia Woolf Society of Great Britain, 2006.
- Davison, Claire. *Translation as Collaboration: Virginia Woolf, Kathrine Mansfield and S. S. Kotliansky*. Edinburgh UP, 2014.
- Diment, Galya. *A Russian Jew of Bloomsbury: The Life and Times of Samuel Kotliansky*. McGill-Queen's UP, 2013.
- Dostoevsky, Fyodor. *Pages from the Journal of an Author*. Trans. J. M. Murry and S. S. Kotliansky. John W. Luce, 1916.
- Glenavy, (Lady) Beatrice. *Today We Will Only Gossip*. Constable, 1964.
- Hippius, Zinaida. *The Green Ring: A Play in Four Acts*. Trans. S. S. Kotliansky. C. W. Daniel, 1920.
- Lawrence, D. H. "Forword." Leon Shestov. *All Things are Possible or the Apotheosis of Groundlessness*. Trans. S. S. Kotliansky. 1920. Living Time Press, 2001. xvii-xviii.

- Marcus, Laura. "Introduction." Virginia Woolf and S.S. Koteliensky, *Translations from the Russian*. Ed. Stuart N. Clarke. Virginia Woolf Society of Great Britain, 2006.
- Mills, Jean. "The Writer, the Prince and the Scholar: Virginia Woolf, D. S. Mirsky, and Jane Harrison's Translation from Russian of *The Life of the Archpriest Avvakum, by Himself*—a Revaluation of the Radical Politics of the Hogarth Press." *Leonard and Virginia Woolf, the Hogarth Press and the Networks of Modernism*. Ed. Helen Southworth. Edinburgh UP, 2010. 150-175.
- Powell, Dilys. "Mr. S. S. Koteliensky." *Times* [London, England] 27 January 1955. 10.
- Reinhold, Natalya. "Virginia Woolf's Russian Voyage Out." *Woolf Studies Annual*. Vol.9. Pace UP, 2003. 1-27.
- . "A Russian Who Fell in Love With Britain." *Evening News* (London). 24 March 1955.
- Smith, C. S. D. S. *Mirsky: A Russian-English Life, 1890-1939*. Oxford UP, 2000.
- Willis, Jr., J. H. *Leonard and Virginia Woolf as Publishers: The Hogarth Press 1917-41*. University Press of Virginia, 1992.
- Woolf, Leonard. *Beginning Again: An Autobiography of the Years 1911 to 1918*. Hogarth, 1978.
- . "Kot." *New Statesman and Nation*. 5 February 1955. 170-72.
- . *Downhill All the Way: Autobiography of the Years 1919 to 1939*. Hogarth, 1967.
- Woolf, Virginia. *The Diary of Virginia Woolf: Vol. 1: 1915-1919*. Ed. Ann Olivier Bell. Penguin, 1979.
- . *The Letters of Virginia Woolf 1912-1922*. Ed. Nigel Nicolson and Joanne Trautmann. Vol. 2. Chatto & Windus, 1976.
- . "The Russian Point of View." *The Common Reader*. Hogarth, 1925. 219-31.
- Zytaruk, George J. "Introduction." Geroge J. Zytaruk ed. *The Quest for Rannim: D. H. Lawrence's Letters to S. S. Koteliensky 1914-1939*. McGill-Queen's UP, 1970. xi-xxxvi.
- 海野弘『ロシアの世紀末—〈銀の時代〉への旅』新曜社, 2017。
- 黒川知文『ロシア社会とユダヤ人—1881年ポグロムを中心に』ヨルダン社, 1996。
- ファイジス, オーランドー『ナターシャの踊り—ロシア文化史・上』訳・島山祐介他, 白水社, 2021。